「張作霖爆殺事件と田中義一内閣」メモ

●「激動の昭和」「動乱の昭和」 ― 発火点は張作霖爆殺事件(昭和3年6月)だった

▽誰がやったのか「満州某重大事件」として
　政友会・田中義一内閣は 総辞職に追い込まれた

▽国民の前に 真相が 明らかにされたのは
　東京裁判の法廷 検察側証人田中隆吉(輝少将)が
　「関東軍高級参謀河本大作大佐の犯行だった」

▽それも 軍司令官も承知している 関東軍の総意

関東軍

満州に駐屯した陸軍部隊。日露講和条約で旅順・大連の遼東半島が日本の租借地となると、関東州と名付け、明治39年5月旅順に関東都督府陸軍部が置かれた。大正8年4月12日、民政は関東庁、兵権は関東軍司令部に分離、司令部条令第1条で軍司令官の職責を「関東州及南満州ニ在ル陸軍諸部隊ヲ統率シ且関東州ノ防備及満州ニ在ル鉄道ノ保護ニ任ズ」。こう規定しているように、遼東半島防備と、旅順－長春間の南満州鉄道(滿鐵)、付属地警備が任務だった。

ところが関東軍は張作霖爆殺後、満州事変(昭和6年9月18日)を起こして満州国建国を果たすと、軍司令官が駐満特命全権大使と関東庁長官を兼任、司令部も新京(長春)に移して、満州の全権を握るようになり、兵力も70万に達した。

▽「番兵役」の出先軍隊が 火を点けて騒ぎを起こし
　混乱に乗じて 満州を 武力占領しようとした

▽河本大佐ら関係者を 軍法会議にかけ
　厳正に 処罰しなかったため
　満州事変→支那事変→太平洋戦争へと
　　軍部の暴走を許す 大きな原因になった

●張作霖が、満州を事実上支配するほどの大きな力をつけたのは、関東軍の援助があったからだった

田中首相も命の恩人

張作霖は明治30年から8年間、馬賊の頭領として近隣を荒らし回っていた。身長5尺2寸、白面痩身、小柄なやさ男だったが、統率力もあり

張作霖(ちょう・さくりん)

1875～1928　奉天省の貧農の家に生まれ、22歳の時に馬賊に身を投じ、頭角を現わす。日本軍と結んで大正5年奉天督軍兼省長となり、満州の全権を掌握。15年北京に進出、大元帥として北京政府を樹立したが、昭和3年6月、蒋介石軍に追われ、奉天に引き揚げる途中、関東軍参謀河本大作大佐により爆殺された

田中　義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929)長州萩の足軽の家に生まれる。陸軍大将。明治31年から4年間ロシアに留学。日露戦争では満州軍参謀。42年軍事課長、軍制改革と在郷軍人会設立。44年軍務局長となり、2個師団増設を要求、拒否した西園寺内閣を陸相辞職で倒し大正政変の因を作る。大正4年参謀次長としてシベリア出兵を推進。7年原・12年山本内閣陸相。14年政友会総裁に迎えられ、昭和2年首相に就任し外相兼務、3次にわたる山東出兵を強行した。治安維持法を強化、共産主義者を弾圧。張作霖爆殺事件処理で、天皇から叱責され総辞職。3か月後急死

田中　隆吉(たなか・りゅうきち)

明治26(1893)～昭和47(1972)島根県生まれ。陸軍少将。関東軍参謀、陸軍省兵務局長を歴任したが、東条陸相と対立、昭和17年予備役。東京裁判で、検察側証人として、先輩、同僚を告発する暴露的証言を行なった

河本　大作(こうもと・だいさく)

明治16(1883)～昭和30(1955)兵庫県生まれ。陸軍大佐。大正15年関東軍高級参謀。張作霖爆殺事件で昭和4年停職処分を受け、翌年予備役。7年満鉄理事、15年

部下からも慕われていた。奉天の戦いの直後、ロシア軍のスパイとして捕まったが、「見所がある。生かしておけば必ず日本の役に立つ」と満州軍総参謀長・児玉源太郎大将に掛け合い、処刑寸前の命を救ってくれたのが参謀の田中中佐だった。

張作霖は部下200名を騎兵隊に編成して隊長になり、それ以来、田中を兄貴分として敬い、陸軍の出世街道を歩んだ田中もまた、陰になり日向になって、その満州支配を助けてきた。

▽大正５年に　奉天督軍兼省長
　昭和２年６月には　北京政府を組織し
　　北は黒竜江から　南は揚子江までに号令

●関東軍はなぜ、その張作霖を殺害したのか？
▽辛亥革命後の中国は　各地に　地方軍閥が割拠
　内戦に明け暮れしていたが　大正１５年７月
　蒋介石が　中国統一の軍事行動を　起こしていた
▽中国民衆のナショナリズム
　反日抗日運動も　日増しに　激しくなっていた
▽新しい中国情勢に　日本が　どう対処するのか
　満州の権益を　どうやって守り　広げていくか
▽外交方針をめぐって
　憲政会・政友会の二大政党が　激しく対立した
▽深刻な経済不況も　張作霖爆殺事件の伏線に

●昭和新時代は、「金融恐慌の嵐」と共に明けた
▽世界的な戦後不況に　関東大震災（大正12年9月1日）
　京浜地区産業界は　工場　商品が焼失
　火災保険金も　支払われる見込みが　なかった

震災手形

政府は、民間銀行の融資した手形で決済不能になったものを救うため、日銀に対して「震災手形を担保に2年間を限度に貸出させ、損失が出た場合は1億円を限度に政府が保障する」救済融資を実施した。しかし、企業の返済は進まず、大正末には震災手形4億3千万円のうち2億円が未決済、焦げ付き同然になっていた。

満州炭鉱理事長、18年山西産業社長（中国山西省太原）。24年中国共産軍に捕えられ、太原戦犯管理所で病死した

児玉　源太郎（こだま・げんたろう）
嘉永5（1852）～明治39（1906）　周防徳山藩出身。陸軍大将。台湾総督、陸相、内相を歴任、開戦前参謀次長となり、満州軍総参謀長として陸軍の作戦指導に当たった。明治39年参謀総長、在任中急死

辛亥革命

明治44年（1911）辛亥の年、10月の武昌蜂起に始まった民主主義革命で清朝は倒れ、翌年1月には孫文を臨時大総統とする南京臨時政府が成立した。

蒋介石（しょう・かいせき）
1887～1975　浙江省生まれ。保定軍官学校を卒業後、日本へ留学、振武学校に学ぶ。孫文の中国革命同盟会に参加、辛亥革命で帰国し革命軍に参加。大正15年、国民革命軍総司令として北伐を開始、昭和3年6月北京に入城して国民政府主席に就任。12年に支那事変が始まると、張学良に監禁され（西安事件）、国共合作を受け入れて対日戦を指導。戦後、国共内戦を起こし、23年中華民国総統。24年内戦に敗れて台湾に逃れ、25年総統復帰

「片岡の舌一枚から起こった」

野党政友会は「震災手形を抱えている不良銀行がどこで、新法案ではどの企業を救済することになるのか」、それを明かせと迫った。片岡直温蔵相は、激しい野次に、次官から「渡辺銀行が支払いを停止する」のメモを渡されると「君らが余り騒ぐから、現にきょう正午頃、渡辺銀行がとうとう破綻しました」。

東京渡辺銀行が「本日の交換尻の決済が出来なくなった」と、大蔵省に善後処

▽昭和２年３月２４日 衆議院予算総会は
震災手形処理法案をめぐり 白熱していた
▽憲政会・若槻礼次郎内閣だったが
大蔵大臣 片岡直温の「失言」から
どの銀行も 黒山のような群衆に 囲まれた
▽取付け騒ぎで 鈴木商店(神戸)の経営危機が表面化

鈴木商店と台湾銀行の腐れ縁

鈴木岩次郎が創立した商事会社。大番頭の金子直吉は、第1次大戦開戦3か月後の大正3年11月、ロンドン支店に「鉄鋼と名のつくものなら何でも金に糸目をつけずに買え」と指令、まず鉄、次に船舶に手を広げ、6年の取扱高は15億。三井物産(11億円)を抜き、日本一の貿易商社に。

日本製粉、神戸製鋼所など子会社60を数えたが、三井、三菱、住友の財閥が自前の銀行を持っているのに、台湾の樟脳を扱っていた関係で金融は台湾銀行に依存。ところが、輸出不振で返済期限が来ても返せず、台湾銀行も追い貸しが次々と重なり、鈴木に貸出総額の半分、3億5千万円も注ぎ込む結果になっていた。

▽「鈴木商店が危なそうだ」「鈴木の震災手形をいっぱい抱えているのは台湾銀行だ」
▽噂が飛び交う中 台湾銀行は 鈴木と絶縁宣言
新規貸出を中止したが すでに 手遅れだった
▽大手銀行が 台湾銀行に対するコールローン
「一時貸しの短期資金を返せ」と 回収を迫った
▽鈴木商店は ４月５日 営業を停止したが
台湾銀行は 鈴木からは取れず コールも返せず
最後の頼みの綱 コール市場からも 締め出され
営業困難となって 日銀に 助けを求めた
▽日銀は「これ以上台湾銀行に貸すには政府保障」
議会の承認が必要だか 議会は３月末に閉会
▽臨時議会を召集していたのでは 議決に手間取り
その間に 台湾銀行が倒産すれば 大混乱になる
▽若槻内閣は 窮余の策として
「日銀が台湾銀行に非常貸出を行い、それによって生ずる日銀の損失を、二億円を限度として政府が保障する」台湾銀行救済策を
緊急勅令の形で 枢密院にかけ 処理しようと

置について相談に来たのは事実だったが、すぐ資金繰りがついて、営業は普段通り続けていた。ただ、肝心の大蔵省への連絡を忘れたために片岡の早とちり失言となってしまった。

片岡　直温(かたおか・なおはる)
安政6(1859)～昭和9(1934)高知県生まれ。明治36年日本生命社長。この間25年衆院議員(当選6回)。加藤内閣商工相を経て若槻内閣蔵相。昭和5年貴族院議員

若槻　礼次郎(わかつき・れいじろう)
慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。桂・大隈内閣蔵相を経て大正13年加藤内閣内相となり、普通選挙法、治安維持法を制定。15年加藤死去で首相、憲政会総裁となったが、昭和2年の金融恐慌で総辞職。昭和5年浜口内閣のもとロンドン会議首席全権として海軍軍縮条約締結。狙撃された浜口の病状悪化で、首相、民政党総裁に就任。満州事変が勃発し8か月で辞職。戦争末期には重臣として和平に尽力。著に「古風庵回顧録」

金子　直吉(かねこ・なおきち)
慶応2(1866)～昭和19(1944) 高知県生まれ。明治19年鈴木商店店員となり、主人没後、番頭として腕を揮い、台湾の樟脳、製糖業に進出。第1次大戦中、積極的な経営戦略を展開、鈴木を三井物産、三菱商事に匹敵する総合商社へ押し上げたが、台湾銀行破綻から挫折した

台湾銀行

日本統治下の台湾の中央発券銀行。明32年に設立され、日本の台湾支配、中国や東南ジアへの資本輸出に重要な役割を果たした。戦後閉鎖。

●４月１７日、昭和天皇も出席され枢密院本会議

▽伊東巳代治は 真っ向から 反対した

「緊急処分は、天災や事変で議会が開けない場合に限る。これは憲法違反だ」

▽あげくは 台湾銀行救済策は そっちのけで

「若槻内閣の中国外交が軟弱だ」と

外相の幣原喜重郎を 名指しで 非難した

若槻の「古風庵回顧録」から

「その老顧問官は、ますます調子に乗って、陛下の御前も顧みず、『町内で知らぬは亭主ばかりなり』という、俗悪な川柳まで引いて外交攻撃をした。…その時、枢密院は長い間休んでいた病人まで駆り出したので、蒼い顔の顧問官が少なくなかった。政府も閣員全部出席したが、わずか十人ばかり、枢密院の方は二十何人で、とうとう政府案は否決された」

▽緊急勅令は否決され 若槻内閣は総辞職

▽後継内閣は 元老西園寺公望の推薦で

野党第一党の 政友会・田中義一内閣に

●田中内閣、緊急の課題は金融不安の解消

高橋是清蔵相の果断な措置

激しい取付けで、日銀の貸出は月初めの2倍、24億円。田中内閣は4月22日、全国の銀行に2日間の休業を命じ、緊急勅令で3週間のモラトリアム（支払停止）を実施。日銀に対しても5億円の政府支払い保障を決めたが、枢密院もあっさり承認した。猶予期間を利用して、大車輪で大量の札を印刷、それでも印刷が間に合わず、片面刷り、裏が真っ白の200円札が出回った。

36銀行が休業に追い込まれたが、5月10日、銀行が店頭に山のように札を積んで支払いを再開すると、取付けの嵐は沈静化していった。

この金融恐慌は、預金者に中小銀行から財閥系銀行へと、預金先の移動を促した。1240もあった普通銀行は、昭和3年末には881に減り、三井、三菱、住友の三大財閥が財界での地位を不動のものにしたのも、この時だった。

枢密院

旧憲法下の天皇の最高諮問機関。明治21年設置され、条約・勅令など重要な国事を審議した。議長、副議長、顧問官、書記官長らで組織され、成年以上の親王、国務大臣も参加できた。昭和22年廃止。

伊東　巳代治（いとう・みよじ）

安政4（1857）～昭和9（1934）長崎県生まれ。伊藤博文に認められ、伊藤の渡欧に随行、明治憲法草案の起草に従事。枢密院書記官長、伊藤内閣書記官長、農商務相を歴任。明治32年から枢密顧問官。昭和に入ってから、枢密院最長老として、台湾銀行救済の緊急勅令案を否決、5年のロンドン海軍軍縮条約審議では統帥権干犯問題で浜口内閣を攻撃した

伊藤　博文（いとう・ひろぶみ）

天保12（1841）～明治42（1909）周防生まれ。松下村塾に学び、尊皇攘夷運動に参加。明治6年参議兼工部卿、11年内務卿。15年憲法調査のため渡欧、18年内閣制度を創設し初代首相。21年枢密院議長。22年明治憲法制定。25年第2次内閣を組織、日清戦争で下関講和条約調印。31年第3次内閣を組織。33年立憲政友会総裁となり第4次内閣組織。38年初代韓国統監になったが、ハルビンで暗殺される

幣原　喜重郎（しではら・きじゅうろう）

明治5（1872）～昭和26（1951）大阪生まれ。岩崎弥太郎の女婿。駐米大使を経てワシントン会議全権。大正13年以来、第1次・2次加藤高明、第1次・第2次若槻、浜口内閣外相を務め、親英米路線・平和外交を展開、昭和5年にロンドン軍縮条約を成立させた。戦後20年10月首相。21年進歩党総裁となり、22年衆院議員。24年衆院議長。著に「外交五十年」

●「憲政の常道」、二大政党の交代を実現させたが…

▽内閣が 超議会的機関の枢密院によって
　倒されたのは 憲政史上 初めてのことだった

▽枢密院は 同じような緊急勅令なのに
　若槻内閣では否決し 田中内閣では認めている

▽枢密院の本当の攻撃目標は 幣原外相の中国政策
　台湾銀行救済策を利用し 若槻内閣打倒だった

中国で「南京事件」が起きていた

蒋介石が中国統一のため、各地の地方軍閥打倒の軍事行動を起こしたのは大正15年7月。国民革命軍は南の広州から南京、上海、武漢を目指し、3軍に分かれて北上したので北を征伐する、「北伐」といった。

昭和2年3月24日、革命軍が南京に入城したとき、兵士たちが各国領事館、教会、学校に乱入、英米人などに6人の死者を出した。日本政府は揚子江に停泊中の砲艦から12人の陸戦隊員を領事館に派遣していたが、多勢に無勢。領事から「武力衝突になれば皆殺しになる。抵抗しないでくれ」と頼まれ、やむなく武装解除に応じた。死者こそ出なかったものの、避難していた女性が裸にされ市中を引き回されるという悲惨な事件も起きた。新聞が連日「残虐！筆舌に尽くしがたい大掠奪」と書き立てれば、政友会は若槻内閣弾劾を決議、6大都市商業会議所も「中国に強硬態度で臨め」と要求した。

「日の丸が泥で踏み躙られた。国威の失墜は、幣原外交の不干渉主義が生んだのだ」。幣原が四方八方から非難・攻撃を浴びている時に、台湾銀行救済の緊急勅令が枢密院で審議されることになった。

▽政友会の対中国強硬論者 森恪の働きかけで
　枢密院も 若槻内閣倒閣に 踏み切った

●「幣原外交」とは、どんな外交だったのか

▽大正末から 昭和初めの日本は
　「幣原外交」を軸に 是か非かで揺れ
　　結局は 戦争への道に 突っ走ることに

▽５代の内閣で 通算５年３か月 外相を務めた

西園寺　公望（さいおんじ・きんもち）

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。慶応3年新政府参与となり戊辰戦争に従軍。明治4年フランスに留学し13年帰国。翌年東洋自由新聞を創刊したが、勅命で退社。15年伊藤に同行して渡欧。駐墺・駐独公使を経て第2次伊藤内閣文相、枢密院議長を歴任。36年政友会総裁となり、39、44年首相。大正3年政友会総裁を辞任、以後元老として活動し7年に原内閣を成立させた。8年パリ講和会議首席全権。山県、松方没後は最後の元老として後継首相の奏請を行なった

高橋　是清（たかはし・これきよ）

安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、戦費調達の外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し、大正10年11月、原首相の暗殺で首相、政友会総裁。昭和2年、田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾。満州事変後、犬養・斎藤・岡田内閣蔵相として世界恐慌の危機を乗り切る。二・二六事件で暗殺

森　恪（もり・かく＝つとむ）

明治15(1882)～昭和7(1932) 大阪生まれ。慶応幼稚舎から東京商工中学卒業、大学に進まずに三井物産支那修学生の道を選ぶ。中国では天津支店長を務め、20年近くの間に多くの合弁事業を手がけた。大正9年衆院議員（当選5回）。昭和2年田中内閣外務政務次官となり、東方会議を主宰、山東出兵など、対中国強硬の田中外交を推進した。4年政友会幹事長、6年犬養内閣書記官長

戦後の幣原首相は吉田茂の演出

昭和20年10月、73歳の幣原に組閣の大命が下った時、新聞記者は「幣原さん、まだ生きていたのか」とびっくりした。戦争中は英米派外交官として、

▽一貫しているのは 寛容主義 自由主義
国際協調による 平和共存だが
戦前は「幣原外交」といえば
「軟弱外交」「弱腰外交」の代名詞だった
▽朝日新聞でさえ「霞が関外交が著しく自由主義にかぶれているのは、覆うべからざる事実である」

外交官としての幣原

大阪門真の豪農の次男坊として生まれた。兄坦に続いてまた男の子、喜びが重なったと、喜重郎と命名された。幣原の自由主義的、合理的な考え方は、徳川時代、大名の支配を受けずに商業の中心地として栄えた大阪に、生まれ、育ったことが大きいようだ。入り婿の父親は「自分が幣原家に尽くせる道は子供たちを立派に教育することだ」と、親族会議まで開いて反対する親族を押し切り、子供を大学に入れた。坦は台北帝大総長、妹は大阪で初めての女医に。

幣原は30年間の外交官生活で、半分は外国で過ごし、そのうち8年はアメリカ、イギリス。第1次大戦後に駐米大使、ワシントン会議全権を務め、幣原外交が「親英米的」、「米英一辺倒」と非難された理由も、この経歴にあったし、幣原の外交理念もまた、そこから生まれた。

幣原は暇さえあれば英語の勉強、国際法の研究をした。石射猪太郎（幣原の駐英大使時代に書記官）は、「部下に対して指導とか何とかということはやらない人であった。彼は自分で努力を続け、もっぱら自力で自分を磨いてきた人だから、人もはたから指導を希望すべきでないという考えに支配されていた。また、組織というものを持たない人で、部下を養成して方々に配置し、その組織の力で動かして行こうというような考えは、幣原さんには縁遠かった」

▽独立精神旺盛で 意志強固 節を曲げない気骨
幣原外交に 非難が高まった時
西園寺は「実は、あれが本当の強硬外交なのだ」
▽大正１３年６月 憲政会・加藤高明内閣外相
就任演説で「日本としては同情と忍耐と希望を以て支那国民の努力を望み、統一の成功を祈る」

全く忘れられた存在でマッカーサー元帥も「だいぶ齢だな、英語はしゃべれるのか」と聞いたが、英語にかけては右に出る者もない達人だった。

東久邇内閣外相の吉田茂が「占領下の日本で再建を進めるには米英に信用の厚い幣原が最適だ」と、各方面に働きかけ、幣原内閣となった。

吉田　茂（よしだ・しげる）
明治11（1878）～昭和42（1967）東京生まれ。天津・奉天総領事、外務次官、駐伊・駐英大使を歴任。昭和20年4月近衛らに和平工作を働きかけ憲兵隊に検挙される。戦後、東久邇・幣原内閣外相。21年自由党総裁となり5次の内閣を組織。サンフランシスコ講和条約、日米安保条約に調印。38年引退したが、保守本流の元老として大きな影響力を持った。国葬

幣原　坦（しではら・ひろし）
明治3（1870）～昭和28（1953）喜重郎の兄。歴史学者で東京高師教授、文部省視学官兼東京帝大教授。大正2年広島高師校長となり、昭和3年台北帝大初代総長

石射　猪太郎（いしい・いたろう）
明治20（1887）～昭和29（1954）福島県生まれ。大正4年外務省に入り昭和12年東亜局長、支那事変不拡大に努力。駐オランダ・ブラジル公使を経て、終戦時は駐ビルマ大使。著に「外交官の一生」

加藤　高明（かとう・たかあき）
万延1（1860）～大正15（1926）愛知県生まれ。岩崎弥太郎の女婿。明治27年駐英公使、33年伊藤内閣外相。35年衆院議員となり西園寺・桂内閣外相を歴任。大正3年大隈内閣外相に就任し第1次大戦で対独参戦、中国に「21か条要求」を出す。5年憲政会を組織し総裁。13年護憲三派

▽中国統一の希望と 内政不干渉の中国政策
▽外人記者団との会見でも
「日本の外交は平和、正義、名誉を基礎とする」
▽特色は 武力を持ち出さず 現実的な経済外交

●その頃の日本は、毎年百万人の人口増加と、慢性的な輸入超過に悩んでいた
▽移民を出したくても アメリカは 排日移民法
輸出を増やそうとすれば 外国は 関税引き上げ
▽議会で「毎年、和歌山県が一県ずつ増えている。国土ならいいが、人口だけだ。一体、どうするのか」
▽八方塞がりの日本に 絶好の解決策
目の前の 満蒙の広大な土地 無尽蔵の資源
▽朝日新聞が社説で「日本の人口食糧問題を解決するには、産児制限励行の消極策か、満蒙移出の積極策しかない」
▽満蒙に はけ口を求め
特殊権益を強調するムードが 国民心理に
▽「幣原外交」が 国民に支持されなかったのも
張作霖爆殺事件が起きたのも ここに原因が
▽幣原が「日本が日露戦争で得た条約上の権利は、満鉄とその付属地だけだ。満蒙に特殊権益などは存在しない」ごく限られた少数意見

●「幣原外交」は、日本の満州政策の１８０度転換
▽大正初めからの 歴代内閣の方針は
張作霖の後ろ盾となり 事実上の満州支配者に
「張作霖のもとで、満州を半ば独立の状態に置いて、日本の権益を守る」
▽陸軍も 地方軍閥に軍事顧問を送り 内戦を支援
▽日本の本音は「分割統治 統一してほしくない」
中央政権が出来れば 日本の権益も不安定に

外相就任早々の難問が第二次奉直戦争

大正13年9月中旬、奉天の張作霖と直隷派(河北省)呉佩孚との内戦が起こると、張作霖は日本政府に援助を求めてきた。奉天総領事も「張作霖が敗れて、直隷軍が満州に侵入してくれば、日本の権益が脅かされる。実力行使も」と具申してきたが、幣原は「絶対不干渉主義」をとり、「一党一派に偏するような措置はとるな」と打

連合を結成、総選挙に勝利し首相。普選法、治安維持法を制定。14年閣内紛争で憲政会単独内閣を組織、在任中に病死

「幣原外交」の根本理念

中国を、日本の経済立国の基礎にする。日本の前途を国土の膨張、拡張で解決しようとすれば国際協調を破ることになる。中国には4億5千万の民衆がいる。日本の工業でまかなうには手ごろなマーケットであり、日本は距離的にも中国に近く、運賃、賃金の面でも、日本が一番競争力が強い。

張作霖に対する歴代内閣の方針

♦「張作霖をして満蒙に有する根拠を失脚せざる如く之を援助する」
(大正10年5月17日 原敬内閣閣議決定)
♦「張作霖が東三省の治安維持に専念し、中央進出の野心を抱かない限り、満蒙に利害関係を持つ日本としては張作霖に出来る限りの同情と援助を与えるよう」(大正11年12月 内田康哉外相から奉天総領事に対する指令)

呉佩孚(ご・はいふ)
1872～1939 中国の直隷派軍閥指導者。大正11年の第1次奉直戦争で、直隷派の覇権を確立したが、第2次戦争と蒋介石の北伐に敗れ失脚。昭和14年、日本に協力する北京臨時政府綏靖委員会委員長

土肥原　賢二(どいはら・けんじ)
明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。関東軍参謀を経て昭和3年張作霖顧問。6年奉天特務機関長、満州事変の計画に加わり、関東軍の政治・謀略部門を担当した。太平洋戦争で第5軍司令官、教育総監、第12方面軍司令官歴任。東京裁判でＡ級戦犯として刑死

電した。しかし10月に入り、張作霖の苦戦が続くようになると、国内でも批判が高まった。

貴族院で強硬派が「幣原の内政不干渉は米英に追随するものだ」と非難すれば、東京では国民大会が開かれ、「無為無策外交、軟弱外交だ」と気勢をあげた。23日の閣議は「張作霖援助のため出兵やむなし」が大勢を占めたが、幣原は譲らない。加藤首相は一旦閣議を休憩、幣原を別室に呼び譲歩を促したが、幣原は「出兵すれば辞職する」とテコでも動かない。

閣議は結論を出さないまま散会したが、夕方飛び込んできた一通の電報、「直隷派の将軍馮玉章(ひょう・ぎょくしょう)が呉佩孚に背いてクーデターを起こし、北京を占領した」で出兵の必要がなくなり、内閣を総辞職から救った。後でわかったことだが、関東軍参謀土肥原賢二中佐が、張作霖に100万円の買収資金を出させ、それで馮玉章を説得した結果の寝返りだった。

●「幣原外交」は薄い氷の上をスケートで滑っているようなもの、氷が割れる要素は幾らもあった

▽「幣原外交」が 成功するには
　中国が 平和な状態であることが 前提条件

▽しかし 内戦は続いていたし「五・三〇事件」も

▽政友会が「居留民を避難させるなんて
　弱腰でなく、軍隊を送ってでも現地で日本人を
　保護すべきだ」 出兵論のボルテージを高めて
　　いるところへ 北伐が始まり「南京事件」

▽五大国(日英米仏伊)公使会議は
　蒋介石に 謝罪と賠償 責任者の処罰を求め
　覚書には タイム・リミットをつけることを決定
　　本国に訓令を仰いだが 幣原は反対
　　報復手段としての 砲撃・封鎖にも反対した

▽米政府も同調したが 納まらないのは日本国内
　政友会は４月１５日(若槻内閣総辞職の2日前)
　　臨時大会を開いて「幣原外交」を批判した

●田中内閣は、「対中国強硬外交」の担い手として、まさに国民期待の中でスタートしたが…

五・三〇事件

中国紡績業で、戦後不況に勝ち残ったのは大資本バックの日英の工場だけ。町には失業者が溢れており、低賃金、長時間労働でも、労働者はいくらでもいた。大正14年2月に苛酷な労働に抗議して上海の日本紡績がストに突入、5月30日には上海全市を巻き込む騒ぎに発展した。英官憲が労働者・学生のデモ隊に発砲し13人の死者を出したため、反帝国主義運動は拡大、広東ではストが17か月も続いた。

英政府は共同出兵を提案したが、幣原は断った。「一旦政治意識に目覚めたのナショナリズムを力で抑え込むのは不可能だ。日本はこの際、居留民を危険地域から一時避難させる考えだ」。イギリスは単独で武力鎮圧を続け広東では169人の死傷者。反帝国主義運動の矛先は、日本に代わり、イギリスに向けられるようになった。

田中政友会総裁の演説

「徒に内政不干渉に藉口して手を拱いて傍観することは、明らかに帝国の東亜における地位の放棄である。東亜の盟主たる日本は対支外交の刷新を期さねばならぬ」

「オラが総理」

田中は、幣原とはあらゆる面で対照的な人だった。幣原が国際協調主義、いつも平和国家をイメージしていたのに対し、田中は「日本の国是は武である」。日本の武力を世界に示すことは、日本の名誉であり、国家目標でもあると考えていた。

首相になったのは63歳の時だが、山口弁丸出しで「オラが、オラが」。親しみやすい庶民的な感じを与え、「オラが総理」と国民的人気も上々だった。

▽陸軍にとっても
　寺内正毅以来８年半ぶり　期待の首相だった
▽田中には　政治家として　一番大切な見識
　自分の考えを貫く　信念に欠けていた

マッチ・ポンプ

田中は参謀次長時代、シベリア出兵（大正7年8月）を立案、拡大させた張本人だった。ところが原敬内閣陸相に就任すると手のひらを返したように兵力削減、撤兵論に転じた。やがては政界入りを考えていた田中が、「もう政党内閣の時代だ」と撤兵論の原首相に擦り寄った結果で、火を点けておいて、今度は消す側に回った。良くいえば変幻自在、悪くいえば優柔不断。

▽首相になっても　マッチ・ポンプ式の綱渡り
　絶えず　外交方針が　ぐらついた
▽陸軍部内に「田中ではダメだ」と不信感
　関東軍の暴走に　つながることになった

●長州閥のホープだったが、若い頃は大変な苦労人

苦労が田中の生き方、考え方を作る

父信祐は殿様の駕籠を担ぐ陸尺、足軽でも一番身分の低い出。ただ武士を誇りとし、田中にも武士道精神、尊皇精神を叩き込んだ。明治になって傘作りをしていたが、生活は苦しく、田中は11歳で村役場の給仕、小学校の先生、長崎裁判所判事の書生。その任地の対馬、松山を転々として、正規の教育を受けていないため、明治16年2月、20歳の時にまず下士官を養成する陸軍教導団砲兵科に入隊した。12月、念願かない士官学校に進んだが、同い年生まれに比べ、2、3年遅れて卒業している。親分肌で義理人情に厚く、頼まれれば「いや」とは言えない性分。中尉の薄給の身なのに、陸士受験を目指す郷里の後輩など7人も下宿に抱え込んでいた。

▽人心収攬の　機微にも通じ
　大衆との接し方　親愛感は　田中の特技だった

●明治３１年から４年余り、ロシアへ留学

新聞記者はライト式建築で完成したばかりの首相官邸（現在は首相公邸）を「カフエー・オラガ」と呼んでいたという。

寺内　正毅（てらうち・まさたけ）
嘉永5（1852）～大正8（1919）長州藩の出身。陸軍大将・元帥。明治35年陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任しシベリア出兵を強行、米騒動で7年に総辞職

原　敬（はら・たかし）
安政3（1856）～大正10（1921）盛岡南部藩出身。外務省政務局長、次官を経て明治35年衆院議員。逓信相、内相を歴任し大正2年政友会総裁。7年9月初の純政党内閣を組織し「平民宰相」として世論の支持を受けたが、東京駅で暗殺される。82冊の「原敬日記」を残す

内田信也の「風雪五十年」から

田中が、総裁就任披露に北海道大会に出かけた時。出迎えの羽織袴の男に「どうだい、お父さんは変わりないかネ」親しげに声をかける。「昨年亡くなりました」と聞くと、「やー、それは気の毒じゃったのう」と、真情を顔に浮かべて労わる。内田が「総裁、お知り合いですか」と尋ねると、「いや、俺は知らんよ」そして「女房や子供を持たない者はあるが、おやじを持たぬ者はいないから聞いてみただけさ」。一同大笑いしたという。

内田　信也（うちだ・のぶや）
明治13（1880）～昭和46（1971）茨城県生まれ。第1次大戦で三井物産を退社して内田汽船を設立、軍需景気で船成金に。大正13年衆院議員（当選7回）。政友会に所属し岡田内閣鉄道相、宮城県知事、東条内閣農商相。公職追放解除後、27年に衆院議員に当選。第5次吉田内閣農相。著に「風雪五十年」

▽３３年６月 ロシア訪問の閑院宮戴仁親王に頼み
首都駐屯の歩兵連隊に 隊付勤務が許された
▽兵隊たちと一緒に 寝起きして
庶民感覚の鋭い目で
ロシア陸軍の欠陥を見抜き 報告している
「貴族の将校と兵士との階級的隔たりが大きく、将校は兵士を奴隷のように扱い、兵士は将校を恐れてはいるが、軍隊の生命である上下一致の精神的結合がない。参謀は特権階級のような存在になっていて前線に出たがらない。表面は強力に見えても内部に弱点を一杯抱えている」
▽３４年１１月 元老・伊藤博文が
日露協商の道を 探りにやって来た

一歩も引かぬ田中の気概

陸軍駐在武官3人で一席設け、露軍の実情、シベリア鉄道の輸送力を説明して、「戦うなら今だ」と迫ったが、伊藤はこう言う。「兵隊と弾薬ばかりでは、戦争はできません。先立つものは金だ。ロシアは20億も正貨の準備があるし、フランスの中央銀行にもたくさん預けている。日本はほんの1億か、せいぜい2億。実に心細いものです」

翌日、伊藤が公使館でくつろいでいるところへ田中少佐が来て、「ロシアが侵略の姿勢を変えない以上、日本としては国運を賭して戦うほかにありません」伊藤が「青二才の書生論を聞きに、ペテルブルクに来たんじゃない。もう帰れ」「青二才とは何ですか。閣下が維新の大業に奔走された時は、何歳でしたか。青二才だったじゃありませんか。私はすでに38歳になっています」最後は「貴様のような奴がここにいるのは、国交上の邪魔だ。東京へ電報を打って帰朝させるから覚悟せい」

間もなく田中に帰国命令が出たので、田中は伊藤の差し金だと、辞職まで考えたという。実際は日露関係緊迫化で、田中の知識、情報を生かすため、参謀本部勤務にしたのだった。

●陸軍時代の田中は、やり手だった

徹底していた田中のやり方

まず1年間ロシア語を勉強して楽に話せるようになると、方々へ旅行した。軍隊の駐屯地だけでなく、スト、デモのあった土地は必ず訪ねてリーダーから話を聞いた。自分の目、耳で帝政ロシアに潜む革命の火種を確かめたのだ。

将校はほとんど貴族、彼らと付き合うには、ダンスが踊れなくてはならない。留学中の広瀬武夫海軍大尉を誘って、帝室付ダンサーに竹の鞭で腰を叩かれながら習った。ロシアを知るには、ロシア人の風俗・習慣に同化せねばと、ロシア正教に入信して説教を聞きに行き、長時間お祈りをし、聖像に接吻まで。

名刺も「ギイチ・ノブスケヴィッチ・タナカ」。姓と名の間に父親の名前を入れたが、「ヨシカズ」と読んでいた名前は、これ以後「ギイチ」と読まれるように。

広瀬　武夫（ひろせ・たけお）
慶応4(1868)～明治37(1904) 大分県生まれ。海軍少佐。明治30年からロシアに留学。日露戦争で第2回旅順口閉塞作戦に福井丸を指揮。行方不明の部下・杉野孫七上等兵曹を沈没間際まで探し続けたが、ボート移乗後敵弾に当たり戦死。中佐に進級し「軍神」と称揚される

閑院宮戴仁親王（かんいんのみや・ことひと）
慶応1(1865)～昭和20(1945) 伏見宮邦家親王の第16王子。陸軍大将・元帥。明治15年フランスに留学、陸士・陸大を卒業。日露戦争で騎兵旅団長。第1・近衛師団長を経て昭和6年～15年参謀総長

山県　有朋（やまがた・ありとも）
天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。松下村塾に学び、奇兵隊軍監。明治2年欧米を視察、帰国後、6年に陸軍卿になり軍制、徴兵制を確立

▽日露戦争が終わると
　日本陸軍も ロシア軍のように ならないよう
　参謀将校の進級には 必ず その前に部隊勤務
　　陸軍改革に 次々と 手を打った
▽「政治軍人」のはしり
　在郷軍人会 大日本青年団を作ったのも 田中
▽陸軍の大御所・山県有朋は
　目を細めるようにして 田中を可愛がった
▽田中が 夜密かに 山県の門を叩けば
　翌日には 田中の主張は
　　山県の意見となって 実現された

●田中は大正１４年４月、政友会総裁へ華麗な転身
▽原敬亡き後の 政友会は
　強力な指導者を失い 派閥抗争に明け暮れ
▽高橋是清が「総裁を辞めたい」と言い出した時
　「表看板」に担ぐべき人として 田中総裁論
▽陸軍を引っ張ってきた 指導力 実行力
　陸軍大臣を 二度もやった ネームバリュー
　　衰えたりとはいえ 長州閥
　　在郷軍人会の 組織力もあった
▽古島一雄が「君は今度商売違いの政党総裁になるそうだが、政党は選挙をやって初めて自分のものになる。君は政友会を率いて選挙に勝つという見込みがあるか」と 尋ねたところ
　　「おお！それはある。俺は在郷軍人三百万を持っておるでのう！」
▽「田中金脈」豊富な資金調達能力も 大きかった
▽湯水のような 金の出所は
　田中と同じ 萩出身の藤田伝三郎の「藤田組」
　　藤田の甥の 久原房之助

金銭に関して黒い噂が絶えなかった

政友会総裁になる時、「300万円を持参金にした」と言われた。シベリア出兵の陸軍機密費を公債に変えたものを担保として神戸の高利貸・乾新兵衛が融通し、その代償として利権供与を約束したんだとか、議会で問題になった。

▽田中は 上下関係・派閥・地縁・血縁を 大切にした
▽首相になっても 義理人情に頼り 流された

し参謀本部長、内務卿を歴任。18年伊藤内閣内相。22年首相。枢密院議長を経て日清戦争では第1軍司令官。31年再び首相となり、軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争では参謀総長。元老として、長州閥を率い陸軍、政界に君臨した

山県未亡人・貞子の話

「山県は誰よりも田中さんが一番好きでして、田中、田中と言っておられましたが、いつ見えてもガミガミ、小言ばかりです。しかし、その小言の後では食事などせられて帰られるのが常でした」

古島　一雄（こじま・かずお）

慶応1(1865)～昭和27(1952)　兵庫県生まれ。新聞日本、万朝報記者を経て明治44年衆院議員（当選6回）。犬養毅の懐刀として国民党、革新倶楽部で活躍。大正13年、護憲三派連合の成立を斡旋。戦後自由党総裁鳩山一郎の公職追放で後任に推されたが、吉田茂を推薦、以来吉田の指南番に。著に「老政治家の回想」

内田の「風雪五十年」から

金貰いの名人といわれた代議士が、ある総選挙の折、「田中総裁を訪ねて選挙費を貰い、暫らく日をおいてお礼のつもりで総裁邸にゆくと、田中さんはいきなりまた金包みをくれた。心中うれしいやら、おかしいやらであったが、これぞ天の恵み、『いやー、恐れいりました』と口を拭って懐中に収めて帰った。…すっかり味をしめ程を経て三度目の訪問をしたのである。ところが、今度ばかりは田中さんも、『おい、おぬしはもうこの間すんだじゃろうが…』」

▽久原に 報いるため
外相にしようとして反対され 逓信相に

●軍人時代の田中は「精悍で隙のない、何事にも即応できる信念の人、実行の人」が定評だった

シベリア鉄道輸送力について嘘の報告

部下の調査では1日8列車だったが、参謀本部参謀の田中は、「そんなに輸送力があると聞けば、開戦論者も怖じけづいてしまう。シベリア鉄道が単線で、まだ完成していない今こそ、開戦のチャンスだ。複線になって、輸送力が強化されてからでは手遅れになる」 部下に「薬を飲もうとしない殿様に、水だといって薬を飲ませるのは、家来の忠義だ」 1日6列車の報告書を作成させ、御前会議に提出した。

▽良くも悪くも 田中のリーダーシップは
首相になると 急速に 色褪せていった
▽豊臣秀吉が大好きで
「積極進取」が モットーだったが
晩年の秀吉のように「茫漠とした考えを持つ、
隙の多い、頼りない人」が 評価になった

●田中内閣は、中国・山東半島に３回出兵
▽蒋介石の北伐軍が 揚子江を渡り
日本人居留民の多い 山東省に近づいたため
▽田中内閣の看板は
「居留民はあくまで現地で保護する」
「出兵してでも」だったが
田中は 出兵の都度 ためらった
▽結局は 強硬論の外務政務次官
森恪に押し切られ 出兵となってしまった

●昭和２年６月２７日、鳴り物入りで「東方会議」
▽議題は 蒋介石の北伐に どう対処するか
満蒙の権益と治安秩序を どうやって守るか
▽派手好きな田中らしく 総動員方式の会議
外務省 陸軍省 参謀本部のほか
現地の 関東軍司令官 中国公使 奉天総領事
▽１１日間にわたって開く 大がかりなもの

藤田　伝三郎（ふじた・でんざぶろう）
天保12(1841)～明治45(1912)長州萩の醸造家に生まれ、奇兵隊に加わり、国事に奔走。維新後、大阪に出て実業界に入り、長州系高官の縁故を利用し、西南戦争の軍事輸送で巨利を得た。明治14年、藤田組を組織、鉱山業、児島湾干拓に当たり、大阪財界の指導的地位を占めた

久原 房之助（くはら・ふさのすけ）
明治2(1869)～昭和40(1965) 山口県生まれ。藤田伝三郎の甥。藤田組へ入り明治38年赤沢鉱山を買収して日立鉱山と改称。海運・造船・商事に進出し、久原財閥を形成した。第1次大戦後の不況で事業を義兄鮎川義介に委ねて、政界入り。昭和2年田中内閣逓信相。戦後は公職追放解除後27年に政界復帰。日中・日ソ国交回復国民会議の議長を務めた

乾　新兵衛（いぬい・しんべえ）
文久2(1862)～昭和9(1934)兵庫県生まれ。金融業者。酒造家に奉公して婿となり、海運業へ進出、日露戦争で巨利を得た。明治42年神戸信託社長

森は並みの政務次官でなかった

田中は自ら外相を兼務し、政務次官に2年生議員で45歳の森を抜擢したが、その際「おらア、君に外務省と外交の一切を任せる。事実上の外務大臣という肚でやってくれ」と申し渡し、森もまた強硬政策で外務省を引っ張っていった。

張作霖打倒論まで出ている時

張作霖は奉天軍を率いて大正15年4月15日に北京に入った。政権を樹立し、大元帥を名乗るようになると中国全土に号令したい野心も出てくる。しかし、反日・抗日運動が燃え盛っており、今までのように日本にだけ頼っていたのでは

▽議論百出 纏らないまま 田中外交混迷の原因に
▽中でも 真っ二つに割れ対立したのが 満蒙問題
田中が 張作霖を利用しようとのに対し
森や関東軍は「もう張作霖はダメだ。そんな手緩いことをせず、日本の投資と技術で直接満蒙を開発すべきだ」と 主張した
▽張作霖の力が 大きくなり過ぎ おいそれとは
日本の言うことを きかなくなっていた
▽田中の失敗は
「田中内閣は、あくまで張作霖支持で行く」
▽張作霖支持の方針を 明示しなかったため
張作霖に対する考えが 田中と関東軍は
全く ずれたまま 終わってしまった
▽最終日の7月7日「対支政策綱領」を発表
「必要に応じ、断固として自衛の措置に出る」
▽強硬方針を打ち出し これが 関東軍に
「いざという時は武力行使」の 期待を持たせた

「対支政策綱領」(要旨)

一 帝国の権利、利益、在留邦人の生命財産が不法に侵害される恐れがあれば、必要に応じ、断固として自衛の措置に出る。

一 満蒙ことに東三省(黑龍江、吉林、遼寧)地方は、国防上、国民的生存の関係上、重大な利害をもつもので、わが国は特殊の考慮と責務をもつ。

一 万一、動乱が満蒙に波及し、わが特殊の地位権益に侵迫の起こる恐れあれば、それがいずれの方面からくるを問わず、同地方を内外人安住発展の地として保持するために、機を逸せず適当な措置をとる覚悟を持つ。

●田中の張作霖支持には、満蒙5鉄道増設の計画
▽万一 ソ連と戦争になった時
北満州のハルビン チチハルに
いち早く軍隊を送る 戦略鉄道
▽政友会幹事長・山本条太郎を 満鉄総裁にすると
外相代理として 張作霖と 秘密交渉をさせた
▽張作霖は この鉄道増設計画に
「まるで他人の血管や神経が、自分の体の中に入っているようなものだ」と 怒った

肝心の民衆の支持が得られない。

張作霖は、満鉄と並行する鉄道を作ろうとしたり、奉天省内の日本領事館・分館設置を拒否し、反日的色彩を強めた。満鉄が日本にとって「宝の山」なのは、満州縦断の唯一の鉄道で資源輸送を一手に握っていたから。それなのに、満鉄と並行する鉄道にアメリカの借款を働きかけたものだから、「誰のお陰で偉くなったのだ。忘恩の徒だ」と、関東軍、対中国強硬論者の間に張作霖打倒論まで飛び出している時の東方会議だった。

「田中上奏文」の怪文書騒ぎ

田中首相が、東方会議の結果を上奏したものとされ、本文4万字。「田中メモ」ともいわれ、中国語版だけでも10種類、英語、ドイツ語からロシア語訳まであり、戦前の隠れたベスト・セラーとなった。

「支那を征服せんと欲せば、まず満蒙を征せざるべからず。世界を征服せんと欲せば、必ずまず支那を征服せざるべからず…これ乃ち明治大帝の遺策にして…」

上奏文の形式もでたらめ、単純なミスだらけ。完全なでっち上げ文書が、まことしやかに世界を駆け巡る背景はあった。第1次山東出兵の後で中国が神経を尖らせている時、森恪の派手な宣伝で、新聞も「田中強硬外交が登場」と大々的に報道し、軍首脳部も集まって11日間も密議を凝らしたとなれば、それなりの説得力はあった。

犯人については、中国人留学生など諸説あるが、はっきりしない。政府が怪文書のことを知ったのは、2年ほど経って。田中の国際的評判を落とし、「軍国主義日本」のイメージを膨らませる結果になった。

▽山本は 脅したり すかしたりして
　最後は「イエスかノーか」と 詰め寄った
▽密約が成立したのは 昭和２年１０月１５日
　５本の鉄道建設を 満鉄が請け負い 代金は借款
▽張作霖には 反対派買収資金として
　５００万円渡されたが 山本は「これで日本は、
　満州をすっかり買い取ったも同然だ」

●田中はその直前、１０月５日に蒋介石と箱根で会談
▽蒋介石は 国民党の内部事情で
　一旦 革命軍総司令を退くと
　日本の有力者に 国民革命の意義を
　　認識させ 協力を得ようと 来日した
▽会談に同席した 張群は
　蒋介石が「中国革命の目指すところは
　　全国統一である」と 述べたところ
　「田中はサッと顔色を変えた」と 回想している
▽田中が 強調したのは「まず揚子江から南を
　固めよ。何でそんなに北伐を急ぐのか」
▽田中のディレンマ
　反共の蒋介石を 出来るだけ 援助したいが
　その中国統一は 張作霖政権崩壊に つながる
▽蒋介石が「中国統一が完成した暁には、日本が
　承認すること。また満蒙における日本の特殊
　権益を認める」最大限の譲歩を示しても
　　田中は「北伐を支持する」とは 言わなかった

蒋介石は日記に失望を書いている

「田中との会談から、私は次のような結論に達した。中国＝日本の協力は問題外である。田中が我々の革命を望んでおらず、北伐を妨げることを躊躇せず、統一中国を容認出来ないことは、余りにも明らかである」

●革命軍総司令に戻った蒋介石は、昭和３年４月７日、北伐再開を宣言、北京を目指し進撃を開始した
▽済南の張作霖軍を 包囲する形をとったため
　済南駐在武官・酒井隆少佐は １６日
　「日本ハ出兵ヲ決心スヘキ時機ニ到達セル
　　モノト認ム」と 参謀本部に打電した

山本　条太郎（やまもと・じょうたろう）
慶応3(1867)～昭和11(1936) 福井県生まれ。三井物産に入り明治42年常務。大正3年、シーメンス事件（軍艦建造をめぐる汚職事件）で退社。9年衆院議員（当選5回）となり、昭和2年政友会幹事長。同年満鉄総裁

日本に知人の多い蒋介石

蒋介石は、明治40年保定軍官学校に入学、翌年選ばれて日本に留学、振武学校（日本の陸軍士官学校が中国人留学生のために作った学校）に学び、43年春、士官候補生として高田の野砲兵第13連隊に配属された。
44年秋、辛亥革命が起こると直ちに脱営して帰国、革命軍に参加して、新しい革命軍隊の養成に力を入れた。

張群（ちょう・ぐん）
1889～1990 四川省出身。日本の振武学校を卒業し、蒋介石の側近となる。上海市長、外交部長、行政院副院長を歴任し昭和22年行政院院長。29年台湾・総統府秘書長。日本とのパイプ役を果たす

酒井　隆（さかい・たかし）
明治20(1887)～昭和21(1946)広島県生まれ。陸軍中将。参謀本部で中国情報を担当、済南駐在武官を経て昭和4年天津駐屯歩兵隊長。参謀本部支那課長、支那駐屯軍参謀長を歴任。支那事変勃発後、張家口特務機関長を務め陸軍切っての中国通。16年第23軍司令官となり、香港攻略に当たる。戦犯として南京で処刑

作られた「済南事件」

毎日新聞は［天津特電］で、こう伝えた。「天津4日午後9時30分発＝唯今当地に入電せる確報によれば昨日南軍（蒋介石）に虐殺された邦人は280名に達し之等は何れも我軍警備区域外居住者である」また［北京特電4日発］では

▽田中内閣は 第２次山東出兵を決定
　天津から歩兵３個中隊 内地から第６師団(熊本)
▽３０日夜 張作霖軍が撤退したため
　蒋介石軍は 済南に 無血入城した
▽５月３日朝 小競り合いから
　日中正規軍 最初の戦闘に 長い戦争の序幕
▽しかも「済南事件」が 起きてしまった
▽酒井少佐は 武力で 大陸の主導権を握ろうと
　ことさらに 誇大な情報を 流し続けたが
　思惑通り ８日に 第３師団(名古屋)の第３次出兵
▽蒋介石の国民政府が 排日政策をとるきっかけに

●田中首相にとって問題は、「蒋介石と一戦を交える」と一歩も引かない構えを見せている張作霖
▽張作霖軍の劣勢は 明らかだった
▽田中内閣は ５月１７日「治安維持宣言」を
　閣議決定し 各国大使にも 通告した

「治安維持宣言」

「南北何レノ部隊タルトヲ問ハス武装軍隊ノ満州ニ出入スルコトヲ阻止スルニ決シ　若シ北軍早期ニ軍ヲ返シ秩序ヨク関外ニ撤退スル場合ニハ必スシモ武装解除ヲ必要トセサルモ南軍ノ関外進出ハ絶対ニ阻止ス」

＊南軍=蒋介石軍　北軍=張作霖軍
関外=万里長城の海側の関門・山海関から外　つまり満州のこと

▽張作霖に「奉天に引き揚げるなら今だぞ。
　戦闘になってからでは武装解除するぞ」
▽山梨半造元陸相 久原房之助を特使に送り 説得

●張作霖は６月３日午前１時５０分、北京を脱出した
▽４日午前５時半 ２０両の特別列車が
　瀋陽駅にさしかかった所で 轟音と共に爆破
　張作霖は 出血多量で ５４歳の生涯を閉じた
▽第一報は ５時間後に 真っ先に 陸軍省に入り
　新聞各社は「陸軍省入電」を 夕刊トップで
▽張作霖の傷は「微傷」とされたが
　危篤説も流れ 安否に 世界の注目が集まった
▽田中首相でさえ 山本満鉄総裁に
　「彼は幸運児だから、すぐ元気になるだろう」

「在留邦人の虐殺されたもの多数で、中には裸体で凌辱惨殺された婦人等酸鼻を極めている」

ところが実際は日本軍の戦死10名、邦人の犠牲者も12名だった。「毎日新聞百年史」によると、酒井少佐が出兵を拡大させるため謀略的な情報操作をしたものだった。邦人犠牲者も、日本軍警備地区への引き揚げ勧告を無視して、現場に留まったモルヒネ、ヘロインの密売者だったという。

山梨　半造(やまなし・はんぞう)

元治1(1864)～昭和19(1944) 神奈川県生まれ。陸軍大将。田中と陸士同期生で大正7年田中陸相のもとで次官となり、10年高橋内閣陸相。昭和2年朝鮮総督となったが、朝鮮疑獄事件に連座し辞職

爆破のとき

特別列車は万一に備え、機関車2台、貴賓車の前後に鉄鋼車を1両ずつ、機関銃隊も乗り込んでの厳戒。

張作霖は娯楽室で麻雀中だった。副官が「間もなく奉天」と告げたので、軍事顧問儀我誠也少佐(ぎが・まさや)らが立ち上がった時、8両目の貴賓車は跳ね飛ばされて後半部から炎上、張作霖は血に染まって倒れた。

第一報では「微傷」

陸軍省入電(6月4日午前10時30分) 瀋陽駅と奉天駅の中間クロッス地点で、張作霖の乗れる列車に爆弾を投じた者あり。これがため張作霖、呉俊陞(ご・しゅんしょう)は微傷を負い、その他数名の死傷者を出したので、ただちに衛隊は便衣隊を狙撃した。わが軍と中国軍とのあいだには、なんらの事故も起こらなかった。

▽死亡がはっきりしたのは ２週間後の１９日
長男の張学良が 後を継いで
奉天省督弁事務代理に 就任したことから

●中国の新聞は一斉に「背後に日本軍あり」
▽元老西園寺も「どうも怪しいぞ。人には言えぬが、
どうも日本軍あたりが元凶しゃあるまいか」
▽陸軍省発表も ８日も経った１２日と 遅れた
▽現場は 京奉線(北京-奉天)と満鉄線が交差
陸橋下は 満鉄線の一部ということで
関東軍の警備地域に なっていた
ところが 張作霖の奉天帰還に際し
「中国憲兵を配置して警戒したい」との
申し入れがあり 関東軍も認めていた

●長いこと、「河本大佐の個人的犯行」とされてきた
▽張作霖殺害が「実は関東軍司令官・村岡長太郎
中将の計画だったこと 河本はその意を汲んで
やったのだ そして 責任をひっかぶったのだ」
▽事件の真相が 河本の口から語られる形で
はっきりしたのは 読売新聞が平成９年１１月
河本の 中国での供述調書を 入手して
雑誌「Ｔｈｉｓ ｉｓ 読売」に 発表してから

●全ては「治安維持宣言」(5月17日)から始まっていた
▽深夜 連絡を受けた関東軍司令部(瀋)には
煌々と 明かり灯り 参謀長・斎藤恒少将は
「戦争だ、戦争だ！」と 走り回っていたという
▽村岡軍司令官は 奉天駐屯の第１４師団から
半分を 山海衛に近い 錦州に派遣し
軍司令部も 奉天に進出することにして
参謀本部に 許可を求めた
▽錦州に出るには「奉勅命令」が 必要だった
関東軍が 国際的に 管轄権を認められている
満鉄付属地以外への出兵 国外出兵になるから
▽関東軍は この機会に 張作霖軍を武装解除して
張作霖の手足を もいでしまい
満州を直接 日本軍の影響下に 置こうとした
▽「治安維持宣言」に 英米の新聞は
「日本はついに満州を保護領とした」

田中の山本総裁宛書簡

今回は張作霖不慮の災難に罹り、誠に兼て御談合致居候将来の画策に頓挫を来す様なる事態出来不致やと心配居候処、彼は幸運児なれば多分回復可致、亦致させて予定の計画を実現致様進み度ものと只管平癒を祈居る次第に御座候

張学良(ちょう・がくりょう)
1901～2001 張作霖の長男。父の爆死後満州の実権を掌握、昭和3年12月易幟を行い満州を南京国民政府の下に統一した。満州事変で追われ外遊。共産党の統一戦線政策に共鳴、11年末、内戦の停止と徹底抗日を要求して蒋介石を監禁(西安事件)、抗日民族統一戦線結成を促した。その後、蒋に捕われ、戦後も台湾で軟禁されていたが、平成2年に名誉回復した

陸軍省発表(6月12日)

…四日午前三時ごろ、怪しき中国人三名が満鉄線の堤上に上ろうとしたのを発見した。わが監視兵が、近づいて誰何したところ、中国人は爆弾を投げようとした。わが兵はすぐ二名を刺殺したが、一名は逃亡した。中国人の死体を検査すると、爆弾二個と三通の通信があった。うち二通は全くの私信だったが、一通は国民軍関東招撫使の書簡の断片だった。これらの点からみて、南方便衣隊であることは疑いない。… 爆薬量は相当大きなものと推測され、投擲したものでないことは確実である。

村岡　長太郎(むらおか・ちょうたろう)
明治4(1871)～昭和5(1930)佐賀県生まれ。陸軍中将。教育総監部課長、歩兵学校長などを経て大正12年第4師団長。昭和2年関東軍司令官。張作霖爆殺事件の責任を問われ、翌年予備役

▽米政府も「中国の主権侵害」と 抗議してきた
▽鈴木荘六参謀総長は
政府の承認がなければ 出兵費が出ないので
関東軍に「別命あるまで出動は待て」と指示
田中首相に 相談すると
「二十一日上奏して裁可を得よう」
▽鈴木は「二十一日に奉勅命令は出る予定」と
関東軍に打電したが 奉勅命令は 出なかった
▽張作霖軍は 5万が 奉天引き揚げを終わり
山海関には 25万の大軍が 集結していた
▽関東軍の兵力は 本来は 1万4千だが
済南に1個旅団派遣していて 9千に過ぎない
▽日本軍が出て行けば 挟み撃ちになり
張作霖軍武装解除のチャンスは なくなった

河本供述による爆殺の経過

村岡軍司令官は、優勢な張作霖軍の指揮攪乱を狙って、北京で張作霖を暗殺しようと、竹下中佐を北京に派遣することにした。河本は「成功の可能性は低い。軍司令官がそこまで本気なら、これは自分たち参謀がやるべきだ」

手段は爆破による列車転覆、場所は満鉄線と京奉線の交差点。地域担当の独立守備隊中隊長・東宮鉄男大尉を呼ぶと「是非やらせて下さい」。爆破犯に仕立てるため中国人の麻薬中毒者3人を現場に連れて行き、列車と一緒に爆殺する予定だったが、途中で逃げ出され2人は刺殺したものの1人に逃げられてしまった。そこで死体を爆破地点に運び、ポケットに「張作霖を爆殺せよ」との蒋介石の命令書を忍ばせた。

▽河本は この爆破で 張作霖軍との衝突を起こし
一挙に 満州武力占領の計画だったが
張作霖軍が動かなかったため 不発に終わった

●内閣で、いち早く知ったのは小川平吉鉄道大臣
▽支那浪人の後援者で その情報ルートから
▽爆破犯の便衣隊に仕立てるため 河本の依頼で
麻薬中毒者を調達した 劉戴明(中国人)が
「中国官憲の追及で身辺が危険になった」と
支那浪人に 助けを求めてきた

鈴木 荘六(すずき・そうろく)
慶応1(1865)～昭和15(1940) 新潟県生まれ。陸軍大将。台湾・朝鮮軍司令官を経て大正15年参謀総長。昭和5年陸相

河本の決意

大正15年3月に関東軍高級参謀に転出した時、目の当たりにしたのは、張作霖反日の気炎だった。東方会議でも何ら満蒙問題の具体策が決まらず、「満蒙問題の解決は、外交手段ではダメだ。武力発動によるほかない。そのためには、張作霖を倒す以外にない」と思った。

爆殺2か月前、親友に宛てた手紙に「満蒙問題の解決は理屈では誰も出来ぬ、武力のほか道なし。張作霖の一人や二人ぐらい、野垂れ死にしても差し支えないじゃないか。今度という今度はやるよ。止めてもどうしてもやってみる。僕は唯々満蒙の地に血の雨を降らすことのみが希望」と書いている。

東宮 鉄男(とうみや・かねお)
明治25(1892)～昭和12(1937)群馬県生まれ。陸軍中佐。独立守備隊中隊長として張作霖爆殺を実行。満州事変中、関東軍司令部付となり、満州移民を推進、昭和7年、第1次武装移民416人をチャムスに入植させた。支那事変で出征、12年11月杭州湾北岸で戦死、大佐に昇進した

小川 平吉(おがわ・へいきち)
明治2(1869)～昭和17(1942) 長野県生まれ。弁護士から明治36年衆院議員(当選10回)。加藤内閣法相、昭和2年田中内閣鉄道相。辞任後の4年、私鉄疑獄・売勲事件に連座して実刑を受け政界引退

白川 義則(しらかわ・よしのり)
明治1(1868)～昭和7(1932)愛媛県生まれ。陸軍大将。陸軍次官、関東軍司令官

▽田中首相は 愕然とし 陸軍大臣白川義則も
なかなか 信じようとは しなかった
▽小川は「とにかく、張学良に
決定的な証拠を握られなければ、もみ消せる」
支那浪人に５千円渡し 劉を大連に隠れさせた

田中に真相が報告されたのは１０月８日

関東軍に問い合せてもラチがあかず、白川陸相は憲兵司令官を現地に派遣、調査させた。爆薬操作をしたのは朝鮮軍から密かに派遣された桐野工兵中尉だったが、酔った勢いで自慢話をしたのが憲兵の耳に入った。

●元老西園寺は、田中に徹底調査して全貌を公表し、関係者を軍法会議にかけ厳罰にするよう、強く求めた
▽西園寺から
「とにかく陛下にだけは申し上げておけ」
▽釘を刺された田中首相は
即位の大礼が終わった １２月２４日 内奏した
「事件には日本の軍人が関与しているようであり、法に照らして厳然たる処分を行なう」

●陸軍の組織を挙げての抵抗は猛烈だった
▽天皇から「軍紀は厳格に維持するように」
注意を受けた田中首相は
白川陸相に 河本大佐の軍法会議を 要求した
▽河本も 会員になっている
陸軍中堅将校の国策研究会「二葉会」は
「河本を守れ」と 陸軍上層部を突き上げ
軍法会議反対運動を 展開した
▽閣内でも 小川 森恪が
各閣僚に 反対を説いて回った
▽当時 日本が承認していたのは
南京政府(蔣介石)でなく 北京政府(張作霖)
「他国の元首の地位にある者を、日本の軍人が暗殺したと公表すれば、日本の信用はガタ落ちになり、満州での日本の地位も危うくなる」

●昭和４年１月２２日、民政党若手代議士永井柳太郎、中野正剛は議会で政府を追及した

を経て昭和2年田中内閣陸相。上海事変に際し上海派遣軍司令官として出征、停戦後の天長節記念式場で爆弾を投げられて重傷を負い死亡

西園寺の見識

「日中関係に一時的に悪影響があるかも知れないが、長い目で見れば、その方が日本の国際信用を高め、中国との関係にも良い影響が現われる」

「二葉会」

陸士16期の永田鉄山少佐ら3人は大正10年10月、南独バーデン・バーデンに集まり、「陸軍刷新、長州閥打破」を申し合わせた。帰国して、20人ほどの同志を集め「二葉会」を結成したが、15期の河本が加入してから満蒙問題を話し合うようになった。

野党民政党(旧憲政会)は知っていた

松村謙三代議士ら6人が満州視察に行き、満鉄で新京に向かう途中、爆殺事件に遭遇した。奉天総領事・林久治郎の所に駆け付けると、「陸軍の連中がやったんだ。これは容易ならんことになる」

林は松村の早稲田大学の先輩で、松村は中国官憲との共同調査結果についても、詳しい情報を得て帰国した。

火薬は日本軍用の高級な黄色火薬、犯人と称する死体は阿片中毒患者であることが一目瞭然、暗殺趣意書も日本人が書いたことがすぐわかる日本式漢文。決定的な証拠は、爆薬と爆破装置を結ぶ電線の撤去をせず、それが橋脚から少し離れた関東軍の鉄道監視所に引き込まれていた。

報告を受けた浜口雄幸総裁は、事は党派を超えた国家的大問題であるとして政争の具にしないよう、処置一切の総裁一任を求めた。

▽「満州某重大事件は、我が守備隊が当然の責務を捨てたがために起こったのである。吾人はその責任を問うているのである」

▽質問内容を 警備上の責任問題に絞ったが
田中首相は「調査中」の一点張り

▽政府の厳しい検閲で 議会の質問も
「満州某重大事件」と ぼかした曖昧なものに
張作霖の名前も 日本軍関与も出ず
迫力に欠ける論戦となった

▽白川陸相も 議会で問題になり
陸軍軍事参議官会議で反対されると 心変わり
「真相は公表せず、河本らは停職など行政処分」

▽軍人を処分する法的権限は 陸相が握っていて
首相には どうにもならない

●田中内閣は６月２６日、正式調査結果を発表した

張作霖爆殺事件調査結果

「満州事件調査の結果、日本人の関係せる証拠を認めず。ただし守備権放棄に対しては当局の責任を問い、それぞれ処分せり」

▽関係者の行政処分は
村岡軍司令官の予備役編入 河本の停職
斎藤参謀長 水野竹三少将（独立守備隊司令官）の譴責

●田中首相翌２７日、参内して上奏した

▽「いろいろ取り調べましたが、
日本の陸軍には幸いにして犯人がいないということが判明致しました。しかし、警備上責任者の手落ちであった事実については、これを行政処分を以て始末致します」

▽天皇は 強い語気で叱責された「それでは前と話が違うではないか。辞表を出してはどうか」

▽久原房之助は「田中の尊皇心は、ほとんど恐怖心にも近いものだった」と 話しているが
田中内閣は ７月１日 総辞職した

▽田中は ９月２９日 狭心症の発作で急死
自殺説が流れるほどの 淋しい最期だった

●田中内閣総辞職の日、河本の停職処分も発令された

松村　謙三（まつむら・けんぞう）
明治16（1883）～昭和46（1971）富山県生まれ。報知新聞記者、富山県議を経て昭和3年の第1回普通選挙に民政党から出馬、衆院議員連続当選13回。戦後東久邇内閣厚相兼文相、幣原内閣農相。28年改進党幹事長、29年日本民主党政調会長。30年鳩山内閣文相となり、34年に訪中、中国と政府・財界のパイプ役を果たす

林　久治郎（はやし・きゅうじろう）
明治15（1882）～昭和39（1964）栃木県生まれ。天津・済南・漢口領事などを経て、昭和3年奉天総領事。7年ブラジル大使

浜口　雄幸（はまぐち・おさち）
明治3（1870）～昭和6（1931）高知県生まれ。逓信次官を経て大正4年衆院議員となり、蔵相、内相を歴任。昭和2年民政党総裁、4年首相。金解禁を実施、深刻な不況を招く。5年4月、海軍軍令部の反対を抑え、ロンドン軍縮条約を締結。東京駅で右翼青年に狙撃され、翌年死去

永井　柳太郎（ながい・りゅうたろう）
明治14（1881）～昭和19（1944）石川県生まれ。早大教授を経て大正9年衆院議員（当選8回）。昭和6年民政党幹事長、拓務相、逓信相、鉄道相を歴任。15年に民政党を脱党して新体制運動を興し16年大政翼賛会総務局長

中野　正剛（なかの・せいごう）
明治19（1886）～昭和18（1943）福岡県生まれ。朝日新聞記者を経て大正9年衆院議員（当選8回）。昭和10年東方会を結成し南進論、日独伊三国同盟を提唱。戦時中、東条内閣倒閣の重臣工作をして逮捕され、憲兵隊から釈放直後割腹自決

▽「爆殺現場の警備に中国憲兵の配置を許した」
　警備担当参謀の責任を 問われたものだった
▽河本の話だと「誰を首謀者にするかで軍司令官が
　ひどく悩んでいたので、私が責任をかぶると、自
　分から申し出た」
▽小磯国昭軍務局長ら 陸軍首脳は
　河本復職に動いたが 1年後に予備役
▽奈良武次侍従武官長を通じての工作も
　天皇の強い反対で 実現しなかった
▽その代わり「陸軍ぐるみ」で 河本の面倒を

●「満蒙第一主義」の田中内閣が残したものは
▽第一に 日中間が 決定的に悪くなった
▽蒋介石は 張作霖爆殺4日後の6月8日
　北京に入城し 中国統一の悲願を 達成した
▽張学良も 12月29日
　蒋介石の国民政府に 忠誠を誓い
　満州の空に 青天白日旗が翻った

誕生日を変えた張学良

父を殺された6月4日は張学良の誕生日で、北京で誕生パーティーをしている時に悲報を聞いた。「誕生日が来るたびに父のこと、父の死を思い出すのは辛い」と、誕生日を6月1日に変えた。だから田中首相が、張作霖の葬儀(8月5日)に外交界の長老・林権助を特使として派遣し、財政、軍事援助を餌に抱き込みを図ったが、張学良は乗ってこなかった。

山本満鉄総裁が満蒙5鉄道の交渉を再開しようとしたところ、「この問題は国民政府の交通部に移ってしまった」と、冷たく言い放った。

▽第二に 国家を動かす政治力学の中で
　陸軍の比重を 決定的に 大きくし
　日本の政治を 軍閥政治に導く きっかけに
▽昭和天皇も「沈黙する天皇」を 作り上げていく
▽西園寺は 27歳の若き天皇を諫めた
　「天皇は、直接自分の意見を表明すべきでない」
▽内閣の決定に対しては
　たとえ 反対の意見を持っていても
　裁可を与えることに 決心された

小磯　国昭(こいそ・くにあき)
明治12(1880)～昭和25(1950)栃木県生まれ。陸軍大将。昭和5年陸軍軍務局長。次官、朝鮮軍司令官、拓相、朝鮮総督を歴任し、19年7月東条の後を受け首相。東京裁判で終身禁固刑、拘置中病死

奈良　武次(なら・たけじ)
明治1(1868)～昭和37(1962) 栃木県生まれ。陸軍大将。支那駐屯軍司令官などを歴任。大正11年～昭和8年侍従武官長

小磯軍務局長の河本宛て書簡

拝啓 爾来御疎情に打過居候処畏兄益々御清栄奉賀候。陳者予て兄の復職問題に関しては独り小生のみならず各方面之有志暗黙の裡に活躍し、参謀総長及教育総監は勿論宇垣(一成)陸相も全然復職に同意し最近阿部臨時代理(信)迄熱烈なる復職必要論者となり、奈良侍従武官長亦復職主唱者と化し候為め、過日聖上に対し奉り御内意相伺候処、外交(対支)及内政(田中内閣没落の因)の両方面に鑑み、復職現役に服さしむるは適当ならさるへしと之御内意有之たる趣にて、臣下として最早施す術無之、復職と同時に待命となる事に決定相成申候。　(昭和5年6月25日付)

林　権助(はやし・ごんすけ)
万延1(1860)～昭和14(1939) 会津生まれ。韓国・清国公使、駐伊大使を歴任、大正5年中国公使。8年関東庁長官。駐英大使を経て昭和4年式部長官